



講演する佐藤征子氏

中世の 阿蘇社 祭礼 近世に大きく変化

佐藤征子氏 講演

神事に関わらない阿蘇氏

熊本乃地名

ニュースレター

発行者 熊本地名研究会
会長 木崎康弘

題字 松野国策 書

熊本地名研究会の7月例会は20日、熊本市のパレアで開き、「上宮（山上）・下宮（宮地）・北宮（手野）―祭礼を通して」と題して、阿蘇の祭祀に詳しい佐藤征子氏（近世史研究員、元熊本県文化財保護審議会委員）が講演した。佐藤氏は、中世の阿蘇社（山上、下宮、北宮を含む）の祭祀の形態はよくわかっていないが、武士団と化した阿蘇大宮司家は祭祀に直接かかわ

つていなかった。ただ、手野の北宮にはお祭りに際して費用を出しており、ここを阿蘇氏が心のふるさとと考えていたのではないかと話した。講話のあと、活発な質疑応答が行われた。この日の出席者は18人だった。

佐藤氏の講演要旨は次の通り。【報告者・藤野】

まず、阿蘇火口（上宮）の異変について日本の歴史書で見てみる。火口が神霊池として最初に出てくるのは延暦3年（796）の『日本後紀』。神霊池に異変があり、3日間の読経と窮民への振る舞いなどがなされている。その後もたびたび同様の異変が起き、折々のほかにもいろいろな施策が取られた。『健甕龍命』の名が初めて出るのは承和7年（840）『続日本後紀』。貞観6年（864）の「比売神領」の崩壊は火口近くの峰のことか。同8年では「阿蘇大

神」となり、同9年に神霊池が「健甕龍命」と認知されている。（以上『三代実録』）

上宮での祭祀について、江戸時代に書かれた『阿蘇宮由來略』の中に「永長元年（1046）に阿蘇大宮司惟行が笠忠久という人を天宮祝（てんきゅうのはふり）に任命した」との記述がある。天宮祝は山上にいて、健甕龍命に仕える神官のこと。ただ、『阿蘇家文書上』によると、建久6年（1195）に天宮祝と阿蘇峰住僧（居住僧の最古の史料）の間で争いがあり、北条時政の沙汰により、僧侶側が実質的に勝利し、山上の祭祀は次第に下宮に移っていったようだ。

上宮での祭祀のうち、12月にあった駒取の祭祀の作法が『阿蘇家文書下』に記載されている。神官12名、権官8名が神馬15疋を連れて御嶽（山上）に阿蘇大明神を迎えに行き、阿蘇下宮に御幸する。下宮には肥後国府からも役人33人が参列する。天宮祝は21日前から御嶽に籠り、筒桶17個の御酒を受け取り、御酒は3社に分けられ

る。屋立の女房（大宮司家の息女）は籠屋で百日間精進するが、この間に在郷の人々がさまざまな準備や世話をする。大明神が御幸すると屋立の女房は二の御殿で御膳を備える。女房は翌日には大宮司館（当時は南郷谷か）に帰る。ここという神官は神職で権官は行政職的なもの。阿蘇氏は直接神事にはかわらない。この作法を見ると、当時の人々の山上にいる健甕龍命への思いがよくわかる。この中世の作法がいつ終わったのかはわかっていない。

次に、下宮（宮地）での祭祀を見てみる。

（2ページに続く）



7月例会の様子

地名研究会 告知板

9月 行事日程

❖ 9月例会 「南阿蘇の石垣文化とエコツーリズム」

東海大客員教授 小林寛子氏

9月20日（土）午後1時30分～ パレア会議室9

❖ 勉強会 テキスト「地名の研究」

9月13日（土）午後1時30分～ パレア会議室5

※テキストは柳田國男著「地名の研究」に変わります。

*地名研ブログでも
地名研の活動や関連
ニュースを発信中

